

### 3. 活力あるボランティアの実現に向けて—公共ホール・劇場運営の新しい可能性

国内の公共ホール・劇場および米国の劇場やホール等におけるボランティア活動の実態を調査することによって、ボランティアの持つ様々な可能性を見出すことができた。しかし同時に、わが国の公共ホールや劇場が抱える様々な問題点が改めて浮き彫りになった点も見逃すことができない。

米国ではそもそも、劇場やホールなど文化施設あるいは芸術機関の活動が、住民の自主的かつ主体的な要求や活動によって生まれ、支えられている。それに対して、わが国では、まずはじめに公共ホール・劇場というハコモノが整備され、その運営方法のひとつとしてボランティアが導入されているケースが多い。こうした事実は、各地に乱立する公共ホールや劇場がそもそも何のために建設され、何を目標に活動を展開していくのかといった根本的な問いかけを発しているとも言える。

別の表現をすれば、施設の運営そのものが民間のボランタリズムの精神に基づいている米国と、行政主導で完成した文化施設に民間のボランティアを導入しようとするわが国では、劇場やホールにおけるボランティア導入のベクトルがまったく逆方向から発生しているとも言える。

しかしながら、そうした状況にあって、ボランティアを導入するわが国の施設には、これまでにはない公共ホール・劇場運営の可能性を見出したり、市民の知恵やアイデア、あるいはネットワークや活動のエネルギーなどをうまく引き出し、施設運営と市民参加の融合を図るなど、ボランティアの導入が、活力ある劇場・ホール運営に結びついていることも事実である。

また、文化施設を拠点に、地域振興やまちづくりまでを視野に入れた活動を展開する市民団体が存在することも明らかとなった。これは、米国における NPO 組織に類似した民間非営利団体の萌芽と捉えることも可能である。都市化の進展を背景に、地域コミュニティや共同体としての意識が薄れつつある時代にあって、特に地方小都市において、公共ホールや劇場を拠点にこうした活動が形成されつつあることは、文化施設におけるボランティア活動という範囲を超え、地域における公共ホールや劇場の役割を見直すという意味からも、注目に値する現象であろう。

ボランティアを導入するそもそもの目的に立ち返ってみると、サポート・スタッフとしてのボランティアから事業の企画・推進役としてのボランティア、あるいは事業パートナーとしてのボランティアまで、いずれも何らかの形で劇場・ホールと市民とのつながりが求められている点が指摘できる。いずれの場合も、「サポートする側—される側」という意識をではなく、公共ホール・劇場とボランティアとのパートナーシップを前提にした運営が望まれる。そうした関係が成立すれば、観客でもない、また単なる施設利用者でもない公共ホールと市民の新しい絆が形成されることにつながるからである。

さらに、ボランティアの制度的なしくみが整い、ボランティア・マネジメントも軌道に乗っ

た段階では、ボランティア活動が地域へ広がり、地域内の他分野のボランティアとの交流や活動が芽生えたり、また、類似施設や他地域との交流など幅広い活動を視野に入れることも可能となってこよう。

わが国の公共ホールや劇場におけるボランティアは、いずれも近年になって導入されたものである。今回調査した事例も、試行錯誤をしながら望ましいボランティアのあり方を模索しているというのが実状であった。ボランティアのあり方や活動内容は、個々の施設の置かれた環境や目的によって、多種多様な可能性が考えられ、それぞれの館に相応しいボランティアのあり方は個々に検討されるべきものである。

そして、市民ボランティアを導入することによって、わが国の公共ホール・劇場の抱える様々な問題点が改善の方向に向かい、劇場やホールが市民ひとりひとりのものとして地域に根づき、ひいては地域活性化の拠点として機能していくことを期待したい。